

2016年7月1日

## 樽前山1793年火砕流に伴う炭化木調査報告

苫小牧エリア

報告者 泉田健一

### ◆報告事項



1739年、樽前山大噴火による火砕流のサージによって倒され、炭化した木々が発掘されたのは、1の沢、シシヤモナイ沢が主であり、その多くは樽前山麓の支笏湖に隣接する沢でそのエリアは千歳市区域のものである。



今回、道道141号樽前錦岡線を挟み、1の沢に隣り合わせる苫小牧市区域の雨裂の沢を調査する。調査にあたり、1の沢で炭化木が見られるのは、標高400m付近から下であることから苫小牧側の沢も400m付近の調査とした。幸い、道道から古い林道跡があり、それを利用し、途中のカーブ部分から沢に向かいルートを取り、獣道を利用して沢に下りた。





沢に下りると雨の後でもあるが思いの外水が流れている。沢に下り、沢の側壁を見てまず感じたことは、1の沢と似た地盤が表面に露出していることだ。層がはっきり分かれ確認出来る場所もある。た

だ、粘土質の層が1の沢より厚いようにも思われる。

今回の短時間調査で、3箇所（左岸2、右岸1）炭化木を確認できた。

#### ◆感想

1の沢のように太い炭化木が今回は見られなかったが、1の沢より沢幅が狭く、沢崩壊も少ないことから木の幹の太い部分ではなく、枝の一部分が露出しているのではないかと想像している。

今後、どの土壌の位置から露出しているのか詳しい状況をチェックする必要があるだろう。